

竜楽のおじやまします！



三遊亭竜楽 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。日本脚本家連盟所属。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。



古賀正義 教授

こが・まさよし 1985年筑波大学教育学研究科単位取得退学。専門は教育社会学。青少年問題や質的調査法を中心に研究。著書に『教えること』のエスノグラフィー、『子ども問題からみた学校世界』など。

優れた○○○○への道は、 多くの人とのお会いから

竜楽 この対談で、いつも初めにおうかがいしているのですが、先生がこういった研究の道に進まれたきっかけは、なんだったんですか。

古賀 僕はあまりちゃんとした理由がないんです。本当は小学校か中学校の教師になりたかったのですが、教育系の学部を選んだのです。僕の担当の先生から「大学院は、今まで5年間必ずやるのが前提だったけれど、筑波大学には2年課程もできたから、そこを受けてみたら」というお話をいただき、とりあえずそこで……と。要するにモラトリアムです。ちゃんと仕事に就けないから逃げようということだったのです。

竜楽 2年課程と5年の課程はどう違うのですか。今の大学院の修士と博士のような感じですか。

古賀 そうです。昔は研究者になるには博士課程を進むのが普通だった。それに対して、筑波大学は、学校の先生方に2年間で専修免許状という少しグレードアップした免許状を取れるような課程を作ろうとしていました。ところが入学してみると、それがともと学部でやっていった勉強の繰り返しだったので、ひど

く授業がつまらなかつたのです。その頃は若気の至りで、今思えば偉そうなのですが、こんなものを聞いてもしようがないなんて思つて、また指導の先生のところへ行つて不満をたらたらと述べたのです。そうしたら、そんなに不満があるなら5年課程へ移ってくればいいではないかと言つてくださったんです。そんな時、学会で卒業論文を発表してみないかということになったんです。今思えば本当にラッキーでした。

竜楽 何があつたんですか。

古賀 教育関係の人たちだけのことを報告するような業界新聞があるのですが、それに私の発表が取り上げられたのです。

竜楽 凄いですね。

古賀 自分でも信じられなかつたのですが……。

竜楽 テーマはどういうものだったのですか。

古賀 先生が子どもを見る見方と親御さんが子どもを見る見方とが、どう違っているかを調べたものでした。例えばA君という子どもについ

よんごんやむのこんのはやま

て、先生と親御さんの評価の違いを生活態度とか性格について両方の人に評価してもらったのです。そうしたら学校の先生は、成績のいい子の順番に性格もいいと評価していたのです。僕は、親御さんはそうではなくて、勉強はできない子でも人格はいいとか、すばらしい子なんだと答えるのではないかと思つて、そういう仮説を立てました。

竜楽 親御さんからアンケートを取つたというのは、自分の子どもに親御さんが点をつけるといふことですよね。

古賀 そうです。パーソナリティーとか、人格とか、生活習慣とか、いくつか項目があつて、親御さんには自分のお子さん1人分を、先生は担任なので子どもみんなについてやつてもらいました。私は、親御さんの評価は、勉強はできない子でもいいところがあるという答えが出ると思つていたのですが、意外にクールな評価になってしまい、成績の良い子は、人柄も良いという結果が出てしまいました。

竜楽 親がそう思うわけですか。
古賀 思つてしまうのです。多く

の回答がそうなつていて、先生の評価とあまり変わらなくなつてしまつたのです。それは親の愛情が欠けてしまつていのではないかと思ひ、もうちょっと成績

が悪い子にも愛情を注いで欲しい、学校のな見方をしないで欲しいと思つて発表したのです。ところが、

先生がだめな子と評価した子に、凄くいい子と評価した親御さんが2、3人だけいた。そのうちのある御宅に行つたら、おばあさんが出てこられて、こういう調査の結果だつたのですが、お話を聞きたいと言つたら「それは私が答えました」とおつ

しやつたのです。「お母さんではないのですか」と聞いたら、「いや、私がつけたんです。うちの子はみんな悪い、悪いと言うけど、いい子な



んです。うちへ帰ってくればこんなによさしいし、いい孫なんです」と孫のいいところを話してくれて、妙に感動してしまいました。本当なら

お母さんが答えなければいけません。私が、私はそのおばあさんに、学校の先生の評価と違ふ面が多いだけでなく、なるほど、こういう気づき方もあつて、評価のつけ方も大事なんだと気づかされたんです。

竜楽 それは画期的だつたのでしょうか。

古賀 画期的ということではないですが、今から二十数年前というところ、お母さんがもう少し愛情を持つて子どもを見るものだと思つていた時代

でしたから、それがあつた意味で裏切られてしまつた「ショック」で、取り上げられたようです。

竜楽 それがきっかけで、こういう研究に就かれたのですか。

古賀 ええ、この一件で、すごく自分の気持ちが変わりました。もしかしたら私はやれるのではないかと今思えば全く幻想にすぎなかつたのですが、先生から君のやつたことはすばらしいと言われ、自信がちよつとでき、それで道が変わつたのです。
竜楽 そうするとご専門としては正式にはどういうことになるのですか。

古賀 教育社会学です。

竜楽 その中でも今は、引きこもりとか、ニートとかの研究ですね。先生のTV番組「知の回廊」のビデオを拝見させていただきました。非常に面白くてためになりました。

古賀 ありがとうございます。最初は、世の中の人だめだと言つて子どもは評価できないと思つていました。でも人間にはいろいろな面があるから、意外にだめだと言われる子にもいいところがあるのでないかそれから、人はどのようにして人を



だめだと判断してしまうのかが非常に気になってしまったのです。そんなことから「困難をかかえた子ども」と接するということをずっと続けてきたのです。

竜楽 そうすると「暴力教室」と呼ばれるような荒れた学校に行かれたこともあるのですか。
古賀 はい。大学院に入学してすぐに、担当の先生と「一緒に、「辺校」と呼ばれる高校を訪ねました。その子供達は、勉強をちゃんとしていないのです。教室へ行っても、席に全然つかない学校でした。校長先生が「あまりひどいから、非常勤の先生がみんな辞めてしまうので、誰かいい人いませんか」と言ったんです。そうしたら私の先生が「こいつがや

ります」なんて言うんですよ（笑）。

竜楽 資格はもう取ってますものね。

古賀 ええ、一応社会科の免許は持っていたのですが、一度も教えたことがないし、それに「暴力教室」だと聞いていたから不安でした。でも、ここで断ってしまうと後がないと思いい、引き受けてしまったわけです。

竜楽 それは思った以上に凄かったですか。

古賀 その頃、校内暴力の嵐が全国で吹き荒れていて、その学校も他に間に漏れずで、教室に入っていくと、いきなりチョークをぶつけてきたり、授業の途中で水をかけてくるとか、そういうことが、日常的でした。最初のひと月くらいは大したことなく過ぎ、これは楽なのかなと思っていました。が、ひと月くらい過ぎてくると、向こうも相手の様子がわかって、こいつは扱いやすいと思っただけでしょう。いろいろなことがありました。

竜楽 そういふときはどうするの

ですか。何事もなかったかのように振舞えるのですか。怒るのですか。

古賀 とにかく怒りましたね。でも向こうは怒られ慣れているのか、受け止め方がうまくて、「ごめんなさい」でもなくて、「やめようぜ。ベランダ行っちゃおう」とか言っただけで済むので、私も負けずに追いかけて「何やってるんだ。ちゃんと教室に戻りなさい」と言うのと、今度は逆に一斉にみんな教室に戻って、僕だけベランダに締め出されてしまったりました。

竜楽 でもそれって、先生に対してある種の親しみを感じないといけないのではないのですか。

古賀 きっとそうですね。若い先生が来た、一生懸命やってる。ベテランの先生だったらそうもいきません。若い先生だし、からかいがいがある。ちょっとやってもすぐ反応するし、からかった後もだめだとは言わねえけど、強烈なことはしない。でも、それがある程度以上になると許されないので、知ってるので、ちょっとやっってはやめてということを繰り返して。そういう意味では、素朴なところもある子たちでした。

竜楽 私の高校も、崩壊こそしてまじりでしたが、そういう先生には面白がって何かしてました。教室に全員そろっていると「今日はみんなそろっているから、じゃあ俺帰るわ」なんていうことがありました。古賀先生のように許してくれそうな人を見てるのです。ですから先生のおっしゃる感覚はよくわかります。だけど、それはまだ接点というかコミュニケーションが何らかのかたちでできているのですよ。

古賀 おっしゃるとおりです。僕も、同じような高校の生徒でした。ある授業になると後ろでトランプをやっていたりして。その先生もよくわかっていて「今日はポーカー勝った？」とか言っただけで（笑）、そういうコミュニケーションはありました。確かに暴力もありましたが、変な言い方ですが、任侠の世界のように、義理人情に気持ちが傾けば助けもするのです。ただ、学校関係の人たちというのはやはり真面目なものです。自分が教育学などで勉強したこと、たとえばこう教えたらうまく教えられるとか、できない子には愛情をとかを実践するのですが、ことごとく

期待は裏切られていくんです。だから教育学というのは学問としては意味があるけれども、役に立つのかなと、ちょっと考えさせられてしまいました。

人と触れ合う感覚

竜楽 そうですか。ところで、その頃は引きこもりなどもあったのですか。

古賀 あったのでしようけれども、今の言葉のような家庭にずっとこもってしまった一歩も外に出ないという子どもたちは本当に少なかつたと思います。少なくとも僕が行っていたような高校にはそういう子はいなかったのです。まだ不登校もあり話題にはなっていないくて、どちらかと言うと外向きに大人に対してメッセージを出したいという子のほうが問題で、内向きの子はあまり目立たなかったですね。ただ、引きこもりではないにしても、中にはうまく言葉が話せないとか、人と触れ合うことができないとあって、教室の片隅にずっとくまっていたような子がいましたかね。それを表す言葉がなかったこともあり、そんな子

どもたちとうまく対応することはできていなかったと思います。

竜楽 これが社会問題化してくるのはやはり最近ですか。

古賀 80年代の終わりにくらいからフリーターという言葉が出てきて、自由で、ある意味でいい加減な人のイメージを伝え、90年代の半ばくらいから今度は不登校とか引きこもりというような、もう少しマイナスイメージの人たちのほうへ切り替わってきます。だから引きこもりが話題になってきたのはこの10年なのです。世の中を驚かせるような大きな事件とともに、問題が表面化していき、急速に注目が高まってきたように思います。

竜楽 引きこもりの性格がニート

トを生み出したんですか。

古賀 今は、これらの人を少しでも社会に出られるような手助けをする支援施設が全国のいろいろなところにありますが、その人たちには、引きこもり、ニート、フリーターという順番が言っていますね。引きこもりの人というのは本当に家にしかない。ニートの人は外には出られる。フリーターの方は、不安定ではあるけれども、自分で働いて、そこそこ収入も得るようになっていくということ、引きこもりの人からするとフリーターが目標だということです。

竜楽 発展段階をたどってフリーターまでたどり着けばかなりいいと。

古賀 かなりいいという感じですね。でも実際問題として

はそんなに段階ごとに行くわけではないと思うのです。いろいろなプロセスというか、紆余曲折を経て、たとえば引きこもりの人が一旦ニートになったのに、また引きこもってしまったり、揺れ動くようですね。

竜楽 この前、落語会の受付にニートの人を使ってくださいというので了解したのですが、この人たちのいるところだけ不思議な空間になっていました。だからいきなり接客業というのも大変だなと思ったのですが。

古賀 接客は一番難しいですよ。一番最初は農作業の手伝いとか、あるいはホテルなどのクリーニングなど、わりと人に触れず、こつこつできる仕事がいいですね。

竜楽 人中に入るといって感じですね。

古賀 はい、そうです。でもニートの人たちには、そういうタイプの人ばかりではないのです。たとえばごく子ども好きで、積極的にスポーツの指導などをしているのですが、場の空気が読めないというのか、1人でとにかく頑張ってしまう人がいるのです。その結果、もう来ないでくださいということになってしまったりする。だからその人には活動力はあるのです。でも空気が読めないものだから、場に入れなくなってしまう。そういうことが数回あると、もう怖くなって前に進まなくなつて



いく。

竜楽 どこかに働きに行つたにしても、職場になじめないというのはやはりそれですね。

古賀 そうだと思います。

竜楽 いろいろな人の中にいるという経験が少ないでしょう。ただでさえ核家族になつて、家庭も少ない人数ですしね。そうだとすると子ども頃からいろいろな場に連れていくということは大切なのでしょうね。

古賀 そうですね。ニートの人たちと話をしていると、自分の家のごく大きいウエートを占めていて、師匠がおつしやつたように、もう少し他の場所でもいいことも嫌なことも経験しながら、ちよつと不安になったり、喜んだりすることを家族と共有すればいいのですが、何かあると

すぐ家の中で1人で自閉して考える傾向にあるのです。

竜楽 1人でいることの寂しさはないのですか。

古賀 孤独に強いということもないでしょうが、一つは、インターネットを熱心にやる人は結構いますよね。そういうところでは孤独でない人もいたりします。

竜楽 つながりを持ちたいという気持ちはあるのですね。

古賀 あるのでしょうかね。そういう意味では全く外の社会と切れているのではなく、フェース・トゥ・フェースが苦手なのです。人は話をしているとき、臨機応変に話さなければいけないでしょう。その人がその時々で感じさせる表情とか、しぐさとか、そういうものを含めて受け

止めなければならぬ。普通は、いろいろなことが分かっていると思いますが、彼らにとっては逆に過剰に感じてしまうのです。

竜楽 ネットなどの情報だと、全部画

面上だけで、そういう感性はときたまされなくてすよね。私などはメールで本当の気持ちを伝えるのは、もの凄く大変だと感じますね。

古賀 そうですね。とはいえ今の若い人たちは、あの少ない情報の中にいろいろなものを込めています。たとえば、真面目すぎると思うと「笑」と入れたら、絵文字を入れたり、仲間の空気とメールが一致するようにします。文字情報だけではない、いろいろなものを入れて気持ちを伝えるのです。

竜楽 感情も伝わるという訳ですね。

古賀 ええ。ただし、メールが普通の関わり方の水準と考え始めてしまえば、大事なことを言うときも、メールくらいの感じで言いたくなりまします。すると面と向かつて「昨日きみのやったことは嫌だ」とか言ったら、なんか死刑宣告のように感じられるんです。

竜楽 言葉の裏に込められている感覚を受け止めることができなくなっているということですかね。

古賀 そうだと思いますね。生で人と触れ合う感覚の水準がどんどん

変化してしまつたのだと思うのです。だからメールでむしろ大事なことを言いたい。

竜楽 でも、昔でも大事なことは手紙で書くということはありましたものね。私はある大学で芸能史を教えていたことがあったんですが、あまり皆さんがコミュニケーションが下手なので、話すコーナーとか、自己紹介とか、あとはプロフィールを書かせて、隣の席の人のプロフィールを持って、売り込みをやらせたんです。そして最後に1対1で話すという試みをやりました。

古賀 師匠と1対1ですか。

竜楽 ええ。そうすると本当にひと言もしやべらない子がいたり、コミュニケーションに飢えていた子がいたりもしました。

古賀 今師匠がおつしやつたようなことは、僕らも授業の中で似たような経験をするのです。たとえば、教職科目という先生になる人が取る科目でも、ソーシャルスキルトレーニングをやるのです。僕が最近やっているものに、100人くらいの教室で、学部が違つたりして、知らない人がいっぱいいる授業があり、その





縮めて拒否されたら、

もの凄いダメーヂを感じてしまうのでしようね。

古賀 そうなんです。

みんな真面目なのですが、すごくダメーヂを感じやすい人たちなんです。たとえ

ば、昔は授業といつても、すごく面白いとか、自分のためになりそうだと思うと熱心になるけれども、一方で、つまらないと思うと、結構間引いて出なかつたりしましたよね。

でも、今の学生さんは本当によく出席します。8割、9割の学生さんがきちっと毎回出るのです。それで出席を取ってくれと要望されたりして。

竜楽 それはすいぶん違いますね。

古賀 違いますよ。びつくりしますよ。それに真面目過ぎるという意味では、今の若い人たちは、結構厳しく自分を責めてしまうのです。

竜楽 自己嫌悪に陥るのですか。

古賀 自己嫌悪がすごいのです。

自己嫌悪症候群のようになってい人がいっぱいいるのです。例えば、教育実習でも今はいい加減でために

なってしまう人はごくわずかで、逆にすごく真面目で、指導の先生の言うことが上手くできずに、僕はこの仕事に向いてないとか、私には、この仕事をやる意味がないのではないかと思い込み、立ち上がれない人も出るので。つまり、自己嫌悪を呼び込むのです。

竜楽 多少はそういう意識を持つということは一つの資質ではあると思いますが、それが極端だと、動けなくなってしまうですね。

古賀 動けなくなってしまう人が多いですね。ニートの人や引きこもりの人も、どちらかと言うとそういうところが強いですね。だからみんなの前で話してしらけたら、もうだめだとか。

竜楽 本当に真面目なのですな。

古賀 杓子定規と言っているくらいです。もうちょっと洒落の一つもわかるようになってくれればいいんですが(笑)。

竜楽 そうなんですか。でもそうやって教育者になっていくんですね。

古賀 はい。私の周りには、教師になるための授業が多いですから、教員や教育関係の仕事に就く人も多

いです。

優れた教師になるとは

竜楽 現代の教師になる人は大変ですよ。我々の時代は、とりあえず先生といえは偉い。先生の言うことを聞かないおまえが悪いという価値観が厳然としてあったではないですか。そういうふうに仰ぎ見られている中で教えるのもう違いますからね。しつかりやろうとしたら、相当な経験とか知識がないと対処できないですね。

古賀 そうなんです。ただ今の子供達は、師匠のおっしゃるような経験とか知識を取り入れながら、教師になろうとしています。世の中の空気をそんな感じに受け止めているのでしょうね。

竜楽 事実その方がいいと思いますが、システムとしてそういうものがちゃんとできていないですね。落語の世界に入門するのも、学生からそのまま入った人と、1回社会人になって1年でも働いた人とは明らかに違います。落語を語らせているぶんにはストーリーを話すだけですが、お客様と直接話をしたり、あるいは

中でまったく知らない人を教室の中で見つけて、挨拶して、自分の自己紹介をして握手するんです。そして全部の人が20人ずつやったら、その瞬間に拍手して終わるのです。これはプログラムとしてあるのですけれども、十数年前にそれを始めたときは「どうして大事な1時間半で、握手させて、ばかじゃないの」としらけていたのです。けど今は全然違います。終わって涙ぐむ人さえいません。感想などを書かせると、こんな大きい教室で知らない人に出会えてよかったとか、知らない人と話してみても、こんな共通点があるとわかってうれしかったですか、そういう感想がいっぱい出てくるんです。

竜楽 触れ合いを求めたいのでしょうかね。でも自分から距離を

司会をさせたりしたときに、ボキャブラリーの豊富さというか、扱い方と言いますか、そういうもので決定的に差が出る感じがします。

古賀 大学院に入ってくる人たちでもそうです。社会人経験のある人は、いろいろな場面、場面で、ちゃんと僕との関係を作ろうとしてくれますが、いきなり学部生から入ってくる、いま一つピントが合わないことをしでかすし、こちらが求めている言葉とか態度を読み込まず、1人で走って行ってしまふこともありますね。ですから、経験を積ませるといふ意味で、学生とニートの人たちの施設などへ出かけて、その人たちと話してもらうことがあります。学生にとつて、こういう人たちと出会うことは、彼らの心が豊かになることなのです。

竜楽 話したくない人に話させるほど難しいことはないですね。

古賀 だからその人たちがちょっと話してくれたら、何か自分の聞きたいことに反応してくれたことが喜びだったりするので。教育の世界というのには、教室の中に多様な社会背景を持った人がいることが前提



ですよ。その多様性に応えられるような引き出しを持たなければなりません。1個だけの引き出しでやって出る限りは教師としてはだめなのだと思います。だから先生になりたい人は、たくさん引き出しを持つためのトレーニングをやったほうがいいですね。そのためにはいろいろなところへ行って、いろいろなタイプの人と話してみる。その人たちを決して切り捨てることなく、ある一定の時間、関係を支えられる能力がすごく大事です。僕らの世界では、お医者さんとは違う意味で「臨床」という言葉が使われるのですが、ベッドサイド、つまりクリニックのように治療するというのはなくて、ベッ

ドのそばに立って、その人と一緒に病という問題について共有できるといふこと。これは、研究するときにも大事なことです。もちろん先生として教えるときにもすごく大事なことだと思います。そういう

気持ちが少ないながらも、相手の立場をまず考えながら何かをしようという入り口ができて、そういう構えで人と接しますよね。それは単に同情すればいいとか、何かこちらから一方的に話しかけてやればいいとかいうことではなくて、相手が何を考えているか、何を今してあげると話せるのかということを考えることです。そういう深い思いやりというか、相手の立場に立てるマナーみたいなのがつかまえられると、研究者としても優れた人になるのではないかと気がするし、もちろん教師としては絶対そういうものがほしいと思います。

竜楽 相当大変な苦勞ですけれども、学生さんには勉強になるでしょうね。

古賀 学生はこれをやると伸びていくのです。彼等はある意味豊かな環境で育ってきた子達ですから、そこで出会う困難をかかえた子どもたちというのは本当にカルチャーショックを感じていると思います。その結果として、自分がかかえているアイデンティティとか、自分が持っている自己イメージとは何だろうと反省的に考えなければならぬことが非常に多くなってしまうのです。そういう意味で大きな成長が期待できるのです。

フリーターについて よくないことですか？

竜楽 ところで、モラトリアムという言葉ができたのは我々の頃ですよ。今はフリーターだったり、ニートに置き換えていいのですか。

古賀 僕らの頃はモラトリアムというのはいくらも後ろめたくて。

竜楽 ある種差別用語的なね。

古賀 そうです、そうです。僕は大学院生になってしまったから、日中フラフラしていたりすると、ご近所の人、「あの何やってるの。あそこの息子は確かいい年のはずな

のに、どうして昼に家にいるの？」という感じをひしひし感じて、モラトリアムである自分に後ろめたさがあつて、いつか就職しなければとか、ちゃんと働かなければと思つたのです。今はあまりそういう感じはないのかもしれない。大人になるまでの長さがどんどん上がってきているというか、30歳くらいまでには結論を出そうという感じがあるのではないかと思いますね。

竜楽 今、朝日新聞で「らくごよみ」という月一回の連載をやっているんですが、「船徳」という落語で、若旦那が勘当されて、出入りの職人のところに居候するのです。2階にやっかいになつていて、しめてジューカイの身の上とよく落語

で言っているのですが、親としてはちょっと遠くに置いて、でもしっかりと見守っているというような対処の仕方と言いますかね、それは責任放棄ではないのです。ですから落語の中である種二ト対策法が考えられるなど思つたのですけれどもね。

古賀 そう言われればそうかもしれませんね。だいたい若旦那も経験不足ということですよ。

竜楽 そうですね。遊び過ぎたり、店の金を勝手に使つたりしているの、積極性はもともとあるのではい

うが。
古賀 積極性はともかく、今の引きこもりや二トの子どもたちも、若旦那並みに豊かとお金持ちだし、親御さんが妙な気遣いするで

しょう。こういうふうにさせないとこの子にだめだという丁寧な育て方ですよ。そういう点では若旦那状態になつて

いる。
竜楽 食うに困つていないですよ。

古賀 だいいち食うということ

は自然にできてしまうものだと思つていきますから、放つておいたら食えなくなつてしまうということが想像力の中に湧いてこないのです。

竜楽 だから支援策としては、外に行かせるようにして、働かないと生きていけないことを実感させることなのですね。

古賀 そうでしょうね。結局他にこれといった方法はないので、まずはいろいろな人と出会うことから、そしてその人がちょっと足を踏み出しやすいようなことを一つひとつやつていくことになると思います。

そう言えば「三年寝太郎」という話がありましたよね。三年寝太郎はだめな人だけれども、ああいう人もいないと世の中は困るよねという話だったと思います。そういう話を彼らが聞かないといけないような気がしますね。

竜楽 それも「あり」だよというように、いろいろな価値観があることが分かれば、あまり自分を責めずに生きることができるのかも知れないですね。今日は、今時の学生さんの様子や、大きな問題と言われている引きこもりや二トについて、本

当にためになる話をお聞きすることができました。ありがとうございます。

~~~~~

同世代の対話は盛り上がり時間を忘れるほどでした。

引きこもりや二トの問題は落語界にも及んでいます。何しろメル本入門志願をしてくる輩もいるのですから……。

先日、前座の勉強会を覗きに行き、打ち上げに参加しました。居酒屋の大きな二つのテーブルは満席。驚いたのは席の配置です。お客様と前座が二つに分かれて座っているのです。「どうしてお客様の間に入らないんだ」

返ってきたセリフがすまじいものでした。

「知らない人はかりなの……」

思わずツツコミを入れましたね

「そんな打ち上げでエーンカイ！」

